

(別紙)

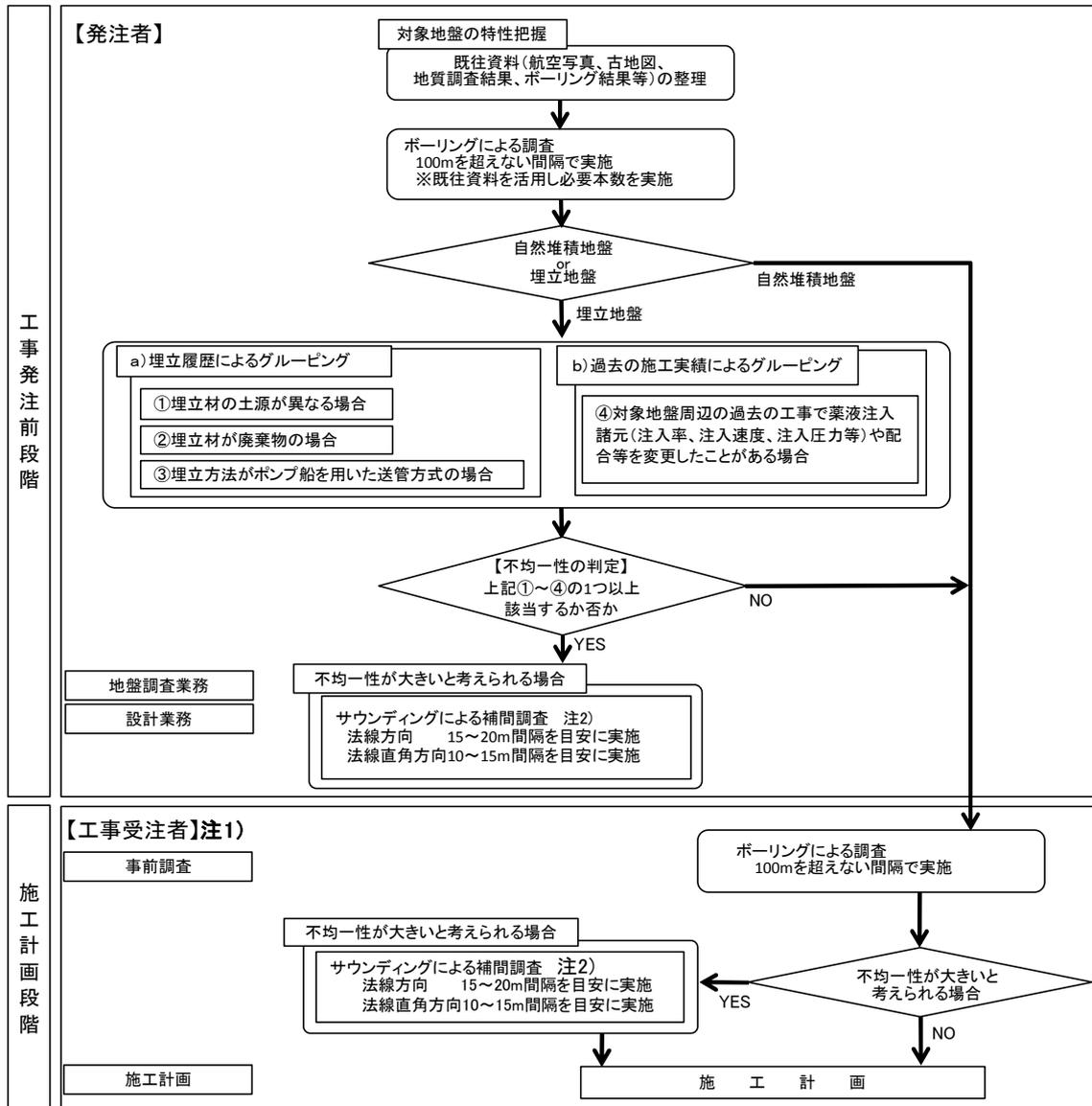
埋立地等における薬液注入工法による地盤改良前の地盤強度等の調査方法について

1. 不均一性の大小の判断

- ・埋立地等における薬液注入工法による地盤改良を行う場合は、工事発注前段階(設計段階)において、「不均一性の大小の判断とサウンディングによる補間調査フロー」を標準に地盤の不均一性の大小を判断する。

2. サウンディングによる補間調査の実施

- ・不均一性が大きいと考えられる場合には、ボーリングによる調査に加えて、サウンディング(間隙水圧が測定できる動的コーン貫入試験等)による補間調査を実施する。
- ・サウンディングによる補間調査は、まず、ボーリングによる調査の近傍で実施する。ボーリングにより得られた土質区分等に関する地盤情報とサウンディングにより得られたNd値等の地盤情報の関係を把握する。
- ・次に、サウンディングによる補間調査を行う。補間調査の間隔は、法線方向は15mから20m、法線直角方向は10mから15mを目安とするが、経済性等を考慮し、ボーリングによる調査の中間付近から開始し、順次調査地点を追加して実施する。なお、不均一性の程度が判断できた時点で補間調査を終了してもよい。
- ・施工計画段階におけるボーリング調査及びサウンディングによる補間調査は、工事受注者が、必要に応じて自らの判断により地盤条件(現状不一致か否か)を確認するために実施する。
- ・発注者は、工事受注者が実施した調査結果により、地盤条件が想定されていたものと大きく異なる場合には、双方協議の上、工事内容を適切に設計変更し、施工計画に反映させる。

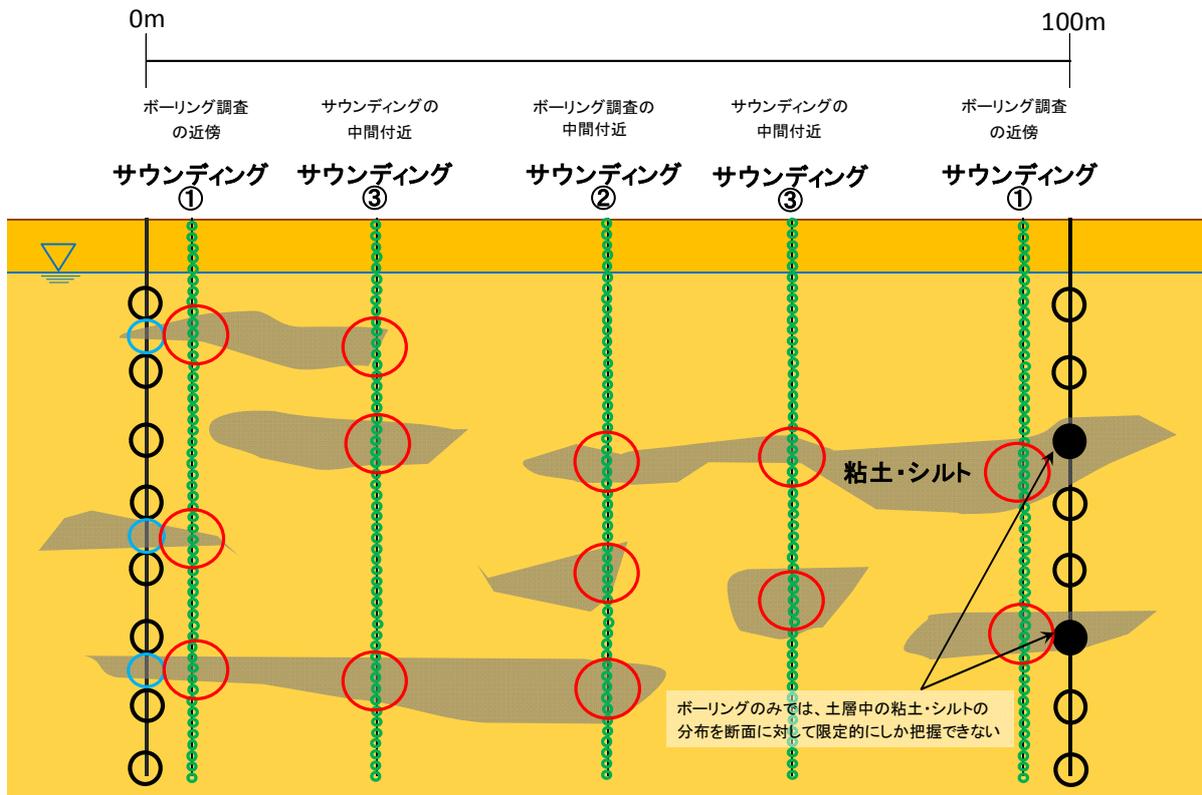


注1) 施工計画段階におけるボーリング調査及びサウンディングによる補間調査は、工事受注者が、必要に応じて自らの判断により地盤条件(現状不一致か否か)を確認するために実施する。

注2) 調査にあたっては、経済性等を考慮し、ボーリングによる調査の中間付近から開始し、順次調査地点を追加して実施する。

図1 不均一性の大小の判断とサウンディングによる補間調査フロー

- ・ 調査にあたっては、経済性等を考慮し、ボーリングによる調査の中間付近から開始し、順次調査地点を追加して実施する。



ボーリングのみでは、土層中の粘土・シルトの分布を断面に対して限定的にしか把握できないが、サウンディング（間隙水圧が測定できる動的コーン貫入試験等）により補間することで対象範囲内に粘土、シルトの分布をより詳細に確認できる、

○：ボーリングのみでは液状化の有無が正確に把握できない箇所
 ○：動的コーン貫入試験(PDC等)により把握可能な箇所

図2 不均一性が大きい地盤の調査のイメージ